

熊本県下における帰化ネナシカズラの生態と防除

第1報 ネナシカズラ類の発生と被害の実態

橋本 昭彦・古閑 孝彦 (熊本県農業試験場園芸支場)

HASHIMOTO, A. and T. KOGA: Ecology and Control of Established Dodder (*Cuscuta* spp.) in Kumamoto Prefecture 1. Dodder Development and Host Damage in the Actual Condition

県内においても外来のネナシカズラ (*Cuscuta* sp.) が農地に侵入していることが明らかになったため、昨年 から本年にかけて侵入状況及び農作物に対する加害状況を調査したのでその結果について報告する。

1. 調査方法

1979年は県下全農業改良普及所に対し、発生ほ場の有無及び発生ほ場についてはネナシカズラの特徴、寄生作物名及び被害の有無、初発年度及び続発の有無、その他侵入先を推理するための諸項目について調査を依頼し、1979～1980年にかけて、新たに発生したほ場について個別に上記項目について追加調査を行うとともに、収集した個体について種の同定を試みた。

2. 調査結果及び考察

ネナシカズラ類発生ほ場は玉名郡1、鹿本郡市6、菊池郡3、阿蘇郡2、熊飽郡市3、上益城郡2、下益城郡1、八代市1、球磨郡3、水俣市1、天草郡8の計33点であった。当該ほ場における初発の年次別推移を見ると1979年に多発した(第1表)。種名同定の結果は入手出来た13点中帰化種が9点と多く、マメダオシ *C. australis* と同定された個体はなかった。又注目すべきはネナシカズラ *C. japonica* の種子を含んだ土壌でキャベツを育苗し、本来木本性植物に寄生するこの種が加害した例が1点あった(第2表)。以上のことから、県内ほ場に発生

第1表 各ほ場における初発生の年次別推移

1975～77	1978	1979	1980	不明	計
6	4	15	3	5	33

第2表 ほ場に発生したネナシカズラの種類

帰化種	マメダオシ	ネナシカズラ	不明*
9	0	1	3

* マメダオシ類似の種

しているネナシカズラ類は大半が帰化種であり、その侵入は1978年頃から急増しているものと思われた。

また当該帰化種の侵入経路を推定する目的で、侵入経路として可能性の高い畜産排泄物の施用状況を取りまとめたところ、施用が計21点(うち1点は重複施用)、施用なしが5点(うち1点は在来種)で、施用ほ場が無農

第3表 畜産排泄物施用の有無とその種類別点数

施用の有無 畜産排泄物の種類	有			不明	無
	牛	豚	鶏		
	15*	5*	2	7	5

* 重複施用1点あり

用の4倍以上であった(第3表)。

寄生をうけた草種はキク科6、ウリ科15、ナス科6、その他の野菜など6、木本3で、ウリ科、キク科、ナス科と続き、マメ科に寄生した例は少なかった(第4表)。

第4表 寄主となった作物の種類

科名など	作物の種類
キク科	キク(5)*、ローゲンセ(1)
ウリ科	スイカ(9)、メロン(5)、キュウリ(1)
ナス科	ナス(2)、トマト(1)、ピーマン(2)、ニエレン・ベルギア(1)
その他野菜	キャベツ(1)、シソ(1)、ニンジン(2)、ダイズ(2)
木本	桑(2)、ミカン(1)

*()内は点数

しかし、野外での寄生草種を観察するとマメ科のメドハギ、カワラケツメイなど、キク科のヨモギ、ヨメナなどに好んで寄生しており、マメ科植物にも侵入する機会があれば充分寄生するものと推定された。

また寄生性難とランクづけされるトマト¹⁾に寄生して被害をあたえた例があり、発芽直後のトマト苗に発芽直後のアメリカネナシカズラ(玉名産)を寄生させたところ100%寄生した。このことから寄生の難易は相手の植物の苗齢によっても大差があるものと想像され、絶対的に寄生しない草種もあるとおもわれるが、ネナシカズラ(*Cuscuta* spp.)の発芽が寄生植物の発芽と一致する条件下のとき最もよく寄生するものと思われた。しかしながら帰化ネナシカズラの場合、我国に1度侵入したものが分布域を拡げるのでなく、少なくとも初発年次の異なる場合は異種を合一して検討している可能性もあり、種はマイクロな種²⁾として取扱うことが必要と思われた。

引用文献

- 1) 古谷友男・小山勇・高林実: 埼玉園試研報, 8: 45-50, 1979.
- 2) 橋本昭彦: 九州農業研究 43: 52, 1981.